

新羅歌謠に表れた日本

新羅歌謠に表れた日本

저자
(Authors) 강산선일랑

출처
(Source) [우리문학연구 17](#), 2004.12, 29-41(13 pages)
[The Studies of Korean Literature 17](#), 2004.12, 29-41(13 pages)

발행처
(Publisher) [우리문학회](#)
The Studies Of Korean Literature

URL <http://www.dbpia.co.kr/journal/articleDetail?nodeId=NODE00596130>

APA Style 강산선일랑 (2004). 新羅歌謠に表れた日本. 우리문학연구, 17, 29-41

이용정보
(Accessed) 삼성현역사문화관
183.106.106.***
2021/07/01 13:54 (KST)

저작권 안내

DBpia에서 제공되는 모든 저작물의 저작권은 원저작자에게 있으며, 누리미디어는 각 저작물의 내용을 보증하거나 책임을 지지 않습니다. 그리고 DBpia에서 제공되는 저작물은 DBpia와 구독계약을 체결한 기관소속 이용자 혹은 해당 저작물의 개별 구매자가 비영리적으로만 이용할 수 있습니다. 그러므로 이에 위반하여 DBpia에서 제공되는 저작물을 복제, 전송 등의 방법으로 무단 이용하는 경우 관련 법령에 따라 민, 형사상의 책임을 질 수 있습니다.

Copyright Information

Copyright of all literary works provided by DBpia belongs to the copyright holder(s) and Nurimedia does not guarantee contents of the literary work or assume responsibility for the same. In addition, the literary works provided by DBpia may only be used by the users affiliated to the institutions which executed a subscription agreement with DBpia or the individual purchasers of the literary work(s) for non-commercial purposes. Therefore, any person who illegally uses the literary works provided by DBpia by means of reproduction or transmission shall assume civil and criminal responsibility according to applicable laws and regulations.

新羅歌謠に表れた日本

岡山善一郎*

目 次

- | | |
|--------------------|-----------------|
| I. はじめに | IV. 日本と関連ある不伝歌謠 |
| II. 「倭」から「日本」へ | V. むすび |
| III. 倭兵撃退のための宗教的儀式 | |

I. はじめに

「戦争と文学」というテーマの範疇に属する新羅歌謠に神歌「彗星歌」がある。『三國遺事』によると、新羅の眞平王(在位579-632年)の時、彗星が出現したために「彗星歌」を作って歌うと、彗星は消滅し、日本兵は國に還ったという。彗星が出現して日本兵の侵攻が予知できた程であるから大規模な日本軍の軍勢であったと考えられるが果たして新羅兵と戦ったのか、それはいつ、どこで起きた事件なのか記されていない。不思議なことに『三國史記』には眞平王の時、日本兵の動靜に関する記事は存在しない。それ故に多様な解釋が行われてきたが、近年筆者は日本側の記録から事件の全容を解釋し、「彗星歌」の製作年代を明らかにした。本稿では、この結果を踏まえて、新羅の對日本觀の推移や日本に関連する新羅歌謠について私見を述べたいと思う。

* 天理大學 教授

Ⅱ. 「倭」から「日本」へ

『三國遺事』に日本に関連する記述は「延鳥郎 細鳥女」(卷1)や「奈勿王 金堤上」(卷1),そして「融天師彗星歌 眞平王代」(卷5)などが代表的である。その中で歌謡と結び付いているのは「融天師彗星歌 眞平王代」であり、「彗星歌」が掲載されている。「彗星歌」の制作動機にもなっている「日本兵」の動靜にまず注目したのは、國名が「倭」ではなく、「日本」と記されている点である。「倭」と「日本」との違いから對日本觀の変化が窺えるので、先ず史書の中で「倭」と「日本」に関連する事件について考えてみたい。

『三國遺事』には阿達羅王(在位154-184年)の出來事として、「忽有一藤、負歸日本¹⁾」と延鳥郎が日本に行ったと記されている。そして奈勿王時代(在位356-402年)の事件として王子が日本に招聘(人質)されるが、「倭王遣使來朝²⁾」と「倭」という國名を使っている。2世紀頃に「日本」という國名を用いるのは『三國遺事』編者の意識であって、当時の名称とは考えられない。従って『三國遺事』における「倭」と「日本」の違いから新羅の對日本の意識を見出すのは困難である。

『三國史記』に「倭」の國名が最初に出てくるのは次のとおりである。

始祖赫居世居世干八年(前50) 倭人行兵 欲犯邊 聞始祖有神德
乃還³⁾

新羅の歴史上、初出の「倭」である。神話的な存在である「赫居世居世干」の時代の出來事を事實として認めるか否かの問題はあるが、「倭」の最初

1) 『謙 觀遊』「延鳥郎・細鳥女」敍覽卷1 949, 漢字は日本の常用漢字体を用いる、以下同)。

2) 『三國史記』新羅本紀第1、民族文化推進會發行197年、西暦は魚の『補增東史年表』(東國文化社195年)による。以下『三國史記』の出處は省略す。

の侵攻記事でもある。それ以後、南解次次雄立十一年(後14)「倭人遣兵船百余艘 掠海邊民戸、云々」の記事に続き、筆者の調査によれば、新羅の律令頒布(法興王七年(520))までに、おおよそ35件も倭人が新羅を侵攻している。倭を敵視していたことは間違いないであろう。新羅の統一以後は、聖徳王三十年(731)夏四月「日本國兵船三百艘 越海襲我東邊」という記事が見えるが、日本の侵攻記事は見当たらない。『三國史記』においては、8世紀頃になると「倭」から「日本」へと國名が替わるが、「日本」という國名が初見するのは、聖徳王二年(703)秋七月の「日本國使至 總二百四人」という記事である。大勢の使節団が新羅を訪問するのは日本國內の事情も反映されているように思われる。つまり、この時期は日本において律令が頒布された(大寶二年(702)十月)³⁾翌年であるから、新しい日本を宣揚するための訪問であったと考えられる。恐らく律令の頒布に伴い、日本という國名を正式に對外に宣布する時期であっただろう。こうしてみると、「彗星歌」に關連する眞平王時代の「日本軍」という名称は「倭兵」か「倭人」の誤りであろう。

「倭」から「日本」に國名が替わった後の、新羅と日本の外交上の問題として、次の記事が目を引く。

景德王元年(742)冬十月 日本國使至 不納

同 十二年(753)秋八月 日本國使至 慢而无礼 王不見之乃回

何が原因で上記のような事件に發展したかは記されていないが、新羅の威信を損なう事件があったに違いない。ところが、

哀莊王四年(803)秋七月 与日本國交聘結好⁴⁾

という記事の以後は、同王の五年(804)夏五月の「日本國遣使 進黄金三百兩」という記事と九年(808)春二月の「日本國使至 王厚礼待之」という記事から分かるように、非常に友好的な關係を維持している。こうした關係は

3) 『續日本紀』「頒下律令于天下諸國」(新日本古典文學大系12巻68頁、岩波書店198年。

4) 新羅と日本が最初に國交を結んだのは、脫解尼師今三年(後59)夏五月(「与倭國結好交聘」であるが、度々國交を結んだ記事がある。

、憲康王四年(878)八月の「日本國使至 王引見於朝元殿」や、同じく八年(882)夏四月の「日本國王遣使 進黃金三百兩 明珠一十箇」という記事にも表れ、新羅と日本に友好関係が繼續していたことが分かる。これ以後、日本との記事は見当たらないが、恐らく友好関係が保たれたと考えられる。

このように新羅の前半は倭の侵攻が多く見られるが、後半の統一新羅時代には、新羅が強大であったためか、倭の侵攻記事は見られなくなる。倭から日本に國名が替わった背景には、日本で日本という國名を宣布したという事實があると考えられる。『三國史記』には、八世紀以後から國名が倭から日本に替わり、同時に本格的な外交関係が行われようになり、日本軍の侵攻記事は見られなくなる。9世紀以後は友好関係が定着していた。

こうした新羅と日本の関係を踏まえると、『三國遺事』の「彗星歌に纏わる眞平王時代(在位579 - 632年)の日本軍に関する記事は、互いに敵對視していた時期の事件であったことがわかる。

Ⅲ. 倭兵擊退のための宗教的儀式

『三國遺事』によれば、文武王は常々「死後、わが身は願わくば護國の大龍になり、仙去を崇めいただき、この國を守護していたい」と語り、倭兵を鎮壓しようと願っていた。そのために感恩寺の建立を發願した。しかし、その完成を見ることなく崩御し、海龍になったので、その子の神文大王(在位681 - 692年)が完成させたが、感恩寺の金堂の階下に東向きの穴を掘り、海龍が寺に入れるようにしたという。また、神文大王は、文武王の化身である龍が現れて、その姿が望見できた所である利見臺に行幸して竹を得た。この竹で笛を作ったが、この笛は「萬波息笛」と呼ばれ、笛を吹くと「敵兵が退き、病は癒え、旱天には恵みの雨が降り、長雨のときは晴天がもたらされた、云々」(『三國遺事』卷2 「萬波息笛」という⁵⁾。「萬波息笛」でいう敵兵とは東海に現れる敵兵であるから倭兵を指すのであろうが、元聖大王(在位785 - 798)の時に

は、「日本王が兵をおこして新羅を伐とうと思ひ立ったが、新羅に萬波息笛という笛があり、この笛が敵兵を退けてしまうということを取こし、使をよこして笛をおけてほしいと頼み込んで来た」（『三國遺事』巻2「元聖大王」）とあり、敵兵を退ける呪物として日本にも知られていたようである。

このように倭兵の侵攻から國を守ろうとした意識が強く表れているのは、恐らく三國を統一した後であるため、文武王と神文大王のときは、國の安全と平和を保つためには倭兵の侵攻を防ぐ事が当時の課題だったからであろう。しかし、ここで注目すべきところは、倭兵侵攻を防ぐために感恩寺を建てたこと、文武王の化身としての海龍を信仰していたこと、そして國家的な呪物としての萬波息笛が吹かれていたことなど、武力以外に宗教・信仰の力を借りてでも倭兵の侵攻を防ごうとしたことである。しかし、感恩寺で倭兵を退かせるために如何なる儀式が行われていたのか、國をあげての海龍信仰はどのような儀式が伴われていたのか、そして萬波息笛はいつ、どこで、どのような場において吹かれていたのか、これらの問いに答えてくれる記録は今のところ発見されていない。

宗教的儀式には摺樂舞が伴うものであると考えられるが、倭兵の侵攻に備えて行われていた儀式の中で歌われていたと思われる新羅歌謠の「彗星歌」が遺されているので、当時の儀式の一端を窺い知ることができる。「彗星歌」に纏わる記述は次のとおりである。

第五居烈郎・第六寶處郎・第七宝同郎等三花之徒、欲遊樞岳、有彗星犯心大星、郎徒疑之、欲罷其行、時天師作歌歌之、星怪即滅、日本兵還國、反成福慶、大王歡喜、遣郎遊岳焉、歌曰（以下省略）（『三國遺事』巻5「融天師彗星歌・眞平王代」）

この記述の「日本兵還國」は、花郎によって撃退されたとする見解⁵⁾、説話的な見解⁶⁾、または「彗星歌」の性格と関連させて國內の政治的な動きと

5) 『謙 麗登』巻2「文虎王法敏」「萬波息笛」條参照、原文省略。

6) 金善基掩承萬彗星（『現代文學』14195月号）以來、多く論者によって支持されている。

解釋する見解等に分かれている。「日本兵還國カ新羅との戦いの後であるならば、歌を歌うことによって敵兵が國に歸ったということは實際に起こり得ないし、そして新羅も何らかの被害を受けたはずであるから、敵兵が歸ったことに、返って慶福になったという意味の「反成福慶」の表現も理に合わないであろう。それで筆者は「日本兵還國」という記事は、次の『日本書紀』推古天皇條の事件を指すのであらうと推測した⁹⁾。

十年春二月己酉朔，來目皇子爲擊新羅將軍。… 供軍衆二萬五千人。
 同夏四月戊申朔，將軍來目皇子到筑紫，…
 同六月丁未朔己酉，… 來目皇子，臥病以不果征討。
 十一年春二月癸酉朔丙子，來目皇子薨於筑紫。…
 同夏四月壬申朔，更以來目皇子之兄當摩皇子。爲征新羅將軍…
 同秋七月辛丑朔癸卯，當摩皇子，自難波發船。丙午，當摩皇子到播磨。時從妻舍人姫王薨於赤石。… 遂不征討¹⁰⁾。

眞平王代(在位579~632年)は日本の敏達天皇8年より推古天皇を経て、舒明天皇4年までに当たるが、上に掲げた推古朝の新羅侵攻の大義名分は新羅と任那の戦いに對して任那を助けるためだと『日本書紀』に記されている。これらの事件だけが日本兵の新羅の侵攻途中、將軍の病死や將軍の妻の死などによって越境できず日本國內で新羅侵攻を断念している。特に推古紀十(602年)の新羅への侵攻は兵力二万五千人程の大々的なものであったから、新羅にもその情報は伝わっていたはずである。緊急した状況の中で、彗星も現れ一層戦争の危機は高まり、彗星の即滅を願う儀式と共に敵を倒すための降伏呪術の儀式も行われたのではないかと思われる。ところが、日本

7) 江(「彗星歌研究」、『中瀨張忠植博士華甲記念論叢』、建國大學出版部、199年、

8) 李承南(「彗星背景の意文學的の形成化」、『國語國文學』12、韓國國語國文學會、199月)、高惠順(「彗星詩歌的性」、『梨花語文論叢』、梨大韓國文學研究所、199年)、『三國遺事鄭歌研究』、

9) 拙論「鄭歌「彗星歌」と歴史記述」、『朝鮮學報』、187、200、

10) 『日本書紀』卷第二十二179、18頁(日本古典文學大系、岩波書店196年)。

兵の將軍の死による突然の新羅への侵攻中止は、新羅側からすれば、その儀式で歌われた「彗星歌の交驗・靈力によるものだと信じられたであろう。この事件はまさしく戦わずして「彗星歌による日本兵の撃退となり、新羅にとって慶福に値する出来事である。「彗星歌」に背景の記述に日本兵の來侵の言及がなく、ただ歸還のみが記されているのは、そうした日本兵の新羅侵攻が突然中止されたという史實が反映されているためであると思われる。倭兵の侵攻に供えて行われた儀式で歌われたと思われる「彗星歌」は次のとおりである。

坭奧禮閔曷 幕唵又譏	昔日、東方の水際に乾達婆の
覺茵諧瑩曷像孺慚孺滂	遊ぶ城を眺め
葆坭曷 音孺曷哈	倭軍も來たと
様畧諧諧業綱眇統	烽火をあげた辺境があった
濂崑譏篆諷霧漑茵禮擇滂	三花の山遊びを聞いて
蕞音否緜豎兒緜藎孺禮譚	月も明るく辺を照らす
坡禮當禮璋忻慚孺滂	道掃く星を眺めて
吽璋綱榮呢綱膝拒縹曷哈	彗星なりと申す人有り
唵策舊懺奔譽曷奕諧	後句、月の下へ昇り去る
聽綱蚘舉沛孚諷曷吽曷雷縹曷雄	これ何の彗星があるうか。

「彗星歌」の解釈は論者によって一様ではないが、右掲の日本語譯は梁柱東の解釈を基にした¹¹⁾。『三國遺事』には第一句の「幕唵又譏」が第二句に入り、第三句と第四句が結合して、歌の形式は九句体になっているが、一般的には右掲のような十句体の郷歌とみなされている。

歌は内容の構成によって、①倭軍の來侵に関するもの(第一句から第四句まで)、②彗星の出現に関するもの(第五句から第八句まで)、③後句の月と彗星に関するもの(第九句と第十句)と三段落に分類する事が出来る。従来は倭兵の來侵を前提にした解釈であったが¹²⁾、前述のように、新羅兵との戦いはなく、出兵の途中で引き返したならば、彗星歌の意味や解釈も変わってくる

11) 梁柱東, 『増訂古歌研究』, 博文書館, 196.

12) 従来の解釈の解釋(については拙論)参照要.

のは必至である。研究史を踏まえたこの歌の意味や解釋についての詳論は筆者の「樂歌『彗星歌』と歴史記述に委ねるが、上の『彗星歌』は次のように解釋した。第一段落は、彗星の出現によって予兆された日本兵の侵略の知らせが昔のように誤認であってほしいという祈願を表しており、第二段落は、彗星に對してその徴である篡奪や殺害を無くし、彗という名称のような慍底、つまり道掃く星となってほしいという願望が託されており、第三段落は、彗星に對してその存在を否定するような歌をもって歌い手の願望を表している。このように『彗星歌』は歌い手の願望を表し、その願望の通りになることを祈願している呪術歌である。そして、五星の異常運行によって彗星が現れるという古代中國の考え方に基づくと、彗星の消滅のための儀式とは五星の運行を正常化させるための祭祀である故に、『三國史記』「祭祀」條の「五星祭」がその役割を担っていたと推定できる。その「五星祭」は「靈廟寺」の南で行われていたと記されている。そして降伏呪術の儀式は國家的な行事であるので、『彗星歌』は眞平王が主管する「五星祭」で歌われたものと推定される。

IV. 日本と關連ある不伝歌謠

日本に關連する新羅歌謠は他にも、納祇王(在位417-458年)の時に作られたという「憂息曲」と「鵝鳴嶺曲」があるが、兩方ともに歌詞が伝わっていないいわゆる「不伝歌謠」である。

1. 「憂息曲」

『三國史記』によれば、倭に人質になっていた納祇王の弟末斯欣は朴堤上の知略によって歸國できて王と再會するが、その時の喜びを歌にしたのが「憂息曲」だといふ。「(納祇)王自作歌舞、以宜其意、今鄉樂憂息曲是也。」(『三國史記』卷45、列伝第五「朴堤上」)歌詞は伝わっていない。末斯欣と朴堤上の話は『三國遺事』(卷1、奈勿王・金堤上)にもあり、『日本書紀』にも収録されているところから¹³⁾、日本にも伝わっていた話であったことがわかる。歌の題目と朴堤上の記述から推測すれば、憂いから終息した喜びを謡ったものだろう。

2. 「鵝述嶺曲」

史書ではなく、『増補文獻備考』樂考に曲名と制作動機が伝わっている。「納祇王時、朴堤上使倭國不返る 其妻不勝悲慕 率三娘子 上鵝述嶺望倭國慟哭而死 因爲鵝述嶺神母 東都樂府有爲鵝述嶺曲」¹⁴⁾と記されているが、尹榮玉氏によれば、東都樂府に収録されている<鵝述嶺>は新羅のものではなく、朝鮮用時代の作品であるが、元來の「鵝述嶺曲」は神母の祭儀で擲がられた儀式歌であったかも知れない¹⁵⁾という。

その他の歌謠に『高麗史』樂志に新羅の歌謠に「利見臺」(不伝歌謠)があると記されているが、日本との關連は記されていない。利見臺は、前述のように、文武王の化身である龍の姿を觀望する所であるので、歌は神文大王の作である可能性はある。ところが「或爲質子、未可知也」¹⁶⁾と人質との關係も記されているので、上掲の「憂息曲」を指しているのかも知れない。

13) 神功皇后五年條にある1)349-35。

14) 『増補文獻備考』中27頁(明文堂198年)。

15) 尹榮玉、『新羅歌謠の研究』252、25頁、蜚雪出版社、198。

16) 『高麗史』中55頁、亞細亞出版社、197。

奈勿王のときに、日本との講和をする際、王子末斯伎の人質が要求されたというのが、具体的な理由は記されていない。この人質の事件をめぐって「憂息曲」や「鵝成嶺曲」が作られたことになるが、「憂息曲」は再會の喜びを歌った歌であり、「鵝成嶺曲」は悲痛のあまりに死んで神母になった朴堤上の妻に関連する歌である。

V. むすび

以上の論述をまとめると次の通りである

1. 新羅の前半期は倭の侵攻が多く見られるが、後半期の統一新羅時代には強大な新羅であったため倭の侵攻記事は見られなくなる。倭から日本に國名が替わった背景には、日本が日本という國名を宣布した事実があったと考えられる。『三國史記』には、八世紀以後から國名が倭から日本に替わり、同時に本格的な外交関係が行われようになって、日本軍の新羅侵攻の記事は見られなくなる。9世紀以後は友好関係が定着していた。

2. 文武王と神文大王のときは、武力以外に宗教・信仰の力を借りて倭兵の侵攻を防ごうとした。感恩寺の創建、大王岩、「萬皮息笛」などがそれである。

3. 「彗星歌」の制作動機は推古紀十(602)年の新羅遠征にある。しかし出陣の途中で日本兵の將軍の死によって中止になった。新羅側からすれば、降伏儀式で歌われた「彗星歌」の交験・靈力によるものと信じられたであろう。この事件はまさしく戦わずに「彗星歌」によって日本兵を撃退したという、新羅にとっては慶福に値する出来事である。

4. 「彗星歌」は倭兵の侵攻に備えて行われた儀式で歌われた歌であるが、歌い手(新羅)の願望を表し、その願望の通りになることを祈願している呪術歌である。

5. 新羅の王子が倭に人質となる事件をめぐり、納祇王と弟の末斯伎との

再會の喜びを歌ったのが「憂息曲」であり、人質を救出した朴堤上は日本で殺され、悲痛のあまりに死んで神母になった妻に関連する歌が「鵝成嶺曲」である。

이 논문은 2004년 10월 31일 투고 완료되어

2004년 11월 1일부터 11월 16일까지 심사위원이 심사를 하고

2004년 11월 23일까지 심사위원 및 편집위원 회의에서 게재 결정된 논문임.

新羅歌謠에 나타난 日本

岡山善一郎

<國文要旨>

新羅歌謠 「彗星歌」는 日本兵의 동향에 관계되어 만들어진 노래로 「전쟁과 문학」의 범주에 속하는 대표적 가요라고 할 수 있다. 그밖에 日本에 인질로 간 新羅의 王子를 구출한 사건을 배경으로 한 「憂息曲」 「鵝成嶺曲」 등이 不傳歌謠로서 전하고 있다. 이렇게 日本과 관련된 新羅歌謠를 중심으로 新羅의 對日本觀, 歌謠와 종교적 의식과의 관계 등에 대하여 私見을 발표하는 것이 本稿의 목적이다.

「彗星歌」에는 「日本兵」으로 기재되고 있는데, 과연 언제부터 新羅에서는 倭와 日本을 구별하였는지, 거기에 따른 사건과 역사 기술에 차이가 있는지 이런 의문으로부터 출발점을 찾아보았다.

『三國遺事』에서 日本과 관련된 대표적 이야기는 「延鳥郎 細鳥女」 「奈勿王 金堤上」 「融天師 彗星歌」 등이 있는데, 2세기 중엽의 이야기로 되어 있는 「延鳥郎 細鳥女」에서는 “日本”으로, 5세기 초의 이야기로 되어 있는 「奈勿王 金堤上」에서는 “倭”로 표기되어 있어, 국명에 대한 의식차를 발견하기 어렵다. 그러나 『三國史記』에서는 비교적 확실한 구별을 하고 있다. 즉 “倭”란 국명은 赫居世王 때부터 보이며, 신라를 침범하려고 했다는 기사이다. 이후 “倭”의 침범은 新羅가 律令을 반포하는 法興王7년(520)까지 무려 35건 정도의 침범을 하고 있다. 그러나 肅陵반포 후부터는 침공 기사는 안보이게 된다. 新羅가 통일을 한 후, 日本도 702년에 律令을 반포하게 된 후로는 외교사절단의 왕래가 있고, 聖德王2년(703)에 처음으로 “日本”이란 국명이 나타난다. 예외는 있지만, 이후로는 “日本”과의 외교관계가 발전되어 9세기 초의 哀莊王시대에는 양국의 우호관계를 나타내는 기사가 많이 나타나며 新羅말기까지 계속된

것 같다.

「彗星歌」의 관련 기술은 倭의 침공이 있었던 시대의 것이다. 倭의 침공을 대비하여 행하여진 “降伏儀式”에서 불려진 鄉歌로 생각되는데, 新羅가 통일 직후에는 「大王巖」, 「感恩寺」, 「萬波息笛」 등으로 倭를 물리치기 위한 종교·신앙적 행사를 갖게 된다. 적대시한 관계를 단적으로 나타나는 것으로 볼 수 있다. 어떤 祭儀式으로서 倭兵을 물리치려 했는지 그 내용을 전하는 기사는 찾을 수 없지만, 「彗星歌」와 같은 祭儀式도 행하여졌으리라 생각된다.

「彗星歌」는 倭兵을 침공을 대비한 “降伏儀式”에서 행한 것으로, 직접적인 전투는 없었던 사건으로, 그 전모는 『日本書記』推古條 10년(602)의 기사가 전하고 있다고 추정하였다. 出兵 도중에 장군과 그 妻가 죽는 사건이 일어나 침공을 그만두는 사건인데, 新羅에서는 祭儀式의 효과로 보게 되었고, 오히려 慶福스러운 일로 생각한 것이다. 이러한 사건을 배경으로 만들어진 「彗星歌」는 唱者의 소망을 노래하고 그 소망대로 되기를 바라는 내용으로 된 呪術歌라고 생각한다.

「彗星歌」와는 달리 不傳歌謠로 전해지고 있는 「憂息曲」은 人質 사건으로 인한 재회의 기쁨을 노래한 서정가로 생각되며, 「鵝成嶺曲」은 비통하게 죽어 神母가 된 朴堤上의 妻에게 바치는 祭儀式謠이었지 아니였을까 생각된다.

핵심어 : 혜성가, 우식곡, 치술령곡, 주술가, 제의식요